

IOM 同盟を中心とする街頭ハガキ展、詩歌原稿展 および姫路原爆展をめぐる資料の整理と検証

Summarizing and Examining Materials of Street Postcards Exhibition, Poetry Manuscripts Exhibition held by IOM Union and Himeji Atomic Bomb Exhibition

田口 麻奈・逆井 聡人

Mana TAGUCHI, Akito SAKASAI

キーワード：IOM 同盟、原爆展、在日朝鮮人運動、国民文学、関西の戦後詩

はじめに

以下に紹介するのは、1950年代前半、姫路に拠点を置く詩人たちが中心となって開催した街頭ハガキ展¹、「反戦平和のための詩歌原稿展」、および「姫路原爆展」の展示資料である。独立や民主化、反帝国主義運動等と結びついた文化運動が全国的に昂揚した1950年代において、詩は運動面でのメッセージを発信するメディアとしての役割を強く担っており、辻詩・壁詩と呼ばれるような、パブリックな場に貼りだされる展示形態が盛んに試みられた。近年、そうした50年代の動向への研究的関心の高まりから、運動の紐帯となった雑誌その他の資料の掘り起こし作業が進められてきた²が、上記のような、機会的に制作・展示された資料群は、当然ながら雑誌等よりもずっと後世に残りにくい。貴重な作品と見なされることもなく、生み出されては廃棄されていったことだろう。その点で本資料は、当時の詩的言語がモノとして公衆に接し生彩を放った、その現場を伝える数少ない資料である。また後述するように、この展覧会は詩歌作品にとどまらず、多くの詩人、言論人からの来信（主にハガキ）を全国から募って展示するという特徴ある試みによって支えられている。50年代に通底する熱気の中かで、広がり繋がってゆく人脈の輪を具体的な形で検証できるという点でも、今日に残された貴重な現物と言えよう。

黒い大きな模造紙に、新聞記事や直筆原稿、また大量のハガキ（反戦平和への意思が表明された年賀状や暑中見舞い状）等を貼りつけたこの展示資料は、調査に着手した時はすでに経年劣化が著しく、大部分は手を触れただけで損壊してゆくデリケートな状態であった。そこで、もとの形態を出来る限り写真に収めながら、後に掲出するごとく分

割可能な資料ごとに解体して整理することとした。すでに全体像を復元しにくい残欠となっていた資料も多いなかで、比較的厚いハガキ用紙は単体としての形態をとどめやすく、もっとも整理しやすい状態であった。そのため、本稿の末尾に、街頭ハガキ展を構成していたと思しいハガキ資料に限り目録を掲出することができた。全国の詩人・文化人から届けられたハガキは、52年の年賀状(73枚)と同年の暑中見舞い(34枚)、翌53年の年賀状(136枚)と、年月日不明のもの(9枚)とを合わせて総計252枚が確認された。石川三四郎、山鹿泰治といった日本アナキズムの旗手たちの名、土居貞子や「われらの詩の会」といった被爆地・広島の詩の牽引者たちの名、川並秀雄、除村吉太郎といった文学研究者たちの名、錦米次郎、押切順三ら各地方の詩を担う詩人たちの名、また意外なところでは川端康成などの既成の大家の名も見え、眺めているだけで興味の尽きない陣容である。ここには目録を掲出するだけにとどめるが、いずれその他の資料と合わせて別途公開を期したい。

なお本資料は、1950年代に広島県呉市で活動していた詩人・宮田千秋(1930-2007)が長年にわたって自宅に保管してきたものであるが、いかなる経緯で、姫路の詩人たちによる街頭展示の現物が宮田氏の手に移ったのか、詳しい事情は分かっていない。ただ当時の宮田氏は「荒地」グループの詩人・鮎川信夫(1920-1986)と共同で詩誌を立ち上げ、全国の詩人たちと活発なやり取りを展開する勢いある若手詩人であったことから、何らかの人を介してこれらの資料に触れ、預かるに至ったであろうことは容易に想像できる。宮田氏はその晩年において、自身の詩的活動に関わる資料が公的機関に保存されることを望み、筆者(田口)もそれを手伝うべく相談を重ねていたが、残念ながら氏は資料の行方を見届けることなく急逝されてしまった。宮田氏の配偶者である故・弘子氏、またご子息の宮田浩爾氏のご協力のもと、ここに、寄託された当該資料を意義ある形で紹介できることを心より嬉しく思う³。

検証作業にあたっては、幸い、二人の専門家の助力を得ることができた。原爆文学および文化運動研究の第一人者である川口隆行氏(広島大学准教授)と、当時の文化運動に影響色濃い在日朝鮮人の文学を専門とする逆井聡人氏(東京外国語大学講師)には、一連の検証作業にお付き合い頂き、原状を確認・共有した上で多くのご助言を頂いた。このうち逆井氏には、専門的見地からさらに考証を進めた論考を寄せて頂くことができた(【論考2】)。これにより、資料の多角的な把握が可能になった。またデジタル複写や資料目録の作成に関しては、赤松優香氏、田浦佳奈氏、山口茉莉子氏ら都留文科大学学生・院生諸氏の協力を得た。資料の歴史的価値に対する敬意に基づき、すべての作業を根気よく丁寧に遂行してくれた諸氏に、記して深謝申し上げる。

(文責：田口麻奈)

注

- 1 この展示は当初「年賀はがき展」ないし「年賀展覧会」という年賀状を軸にした展示であったが、【論考1】で詳述するように、その後、暑中見舞い状も加わった大規模なハガキ展となってゆく。デパートや公民館における巡遊を含め公衆に開かれた

街頭展示を旨とした点から、ここでは総称として街頭ハガキ展と呼んでおく。

- 2 たたとえば道場親信『下丸子文化集団とその時代 — 一九五〇年代サークル文化運動の光芒』（みすず書房、2016年）や、宇野田尚哉・川口隆行・鳥羽耕史ほか編『「サークルの時代」を読む 戦後文化運動研究への招待』（影書房、2016年）など、50年代サークル詩の研究は近年もっとも注目を集めた研究領域の一つであると言ってよい。
- 3 宮田氏の所蔵資料のうち、詩集・詩雑誌に関してはすでに公益財団法人日本近代文学館に寄贈を済ませている。田口麻奈「新収蔵資料紹介 宮田千秋氏旧蔵資料のこと」（『日本近代文学館』館報第278号、2017年7月）、同「『荒地』グループに関連する戦後詩資料の整理と検証——宮田千秋旧所蔵資料目録と解題——」（『国文学論考』53号、2017年3月）参照。なお宮田氏の活動の詳細については田口麻奈『〈空白〉の根底——鮎川信夫と日本戦後詩』（思潮社、2019年）第Ⅱ部第3章に詳述した。

【論考1】IOM 同盟による街頭展示の試みと詩人たちのネットワーク（田口麻奈）

IOM 同盟と年賀展覧会

まず、これから本稿で検証する展示会の中心にいた、IOM（イオム）同盟という詩のグループについて概観しておきたい。IOM 同盟とは、向井孝、山口英、柳井秀（平柳秀三）の三人を発足メンバーとする、戦後の関西詩壇で独自の存在感を有したグループである。「暴力論ノート」等の著作を残し、一般には日本のアナキズム運動史のなかに位置づけられる向井孝（1920-2003）は、戦後長く社会運動に携わってゆくことになるが、1950年代にはIOMの詩人として戦後詩の重要なシーンを担っていた。IOMの名の由来について、当時の向井が語るところを引用しよう。

「エスペラント語の不定量を示すことばに「イーオム」というのがある、そこに一種の意味をこじつけて、たまたま語呂もいいものだから、「イオム」とした（笑）。もうひとつはこれは南方のニューギニアのむこう、アラフラ海に小さい島があって、その、これはもう滅亡してしまった氏族なんですが、その氏族の象徴に「イーオム」という鳥がある。この鳥は、大変美しいんだが、人間に捕えられるとすぐに死んでしまう。（中略）・・・こういうのをもってきてわが同盟の名としたわけなんです。」¹

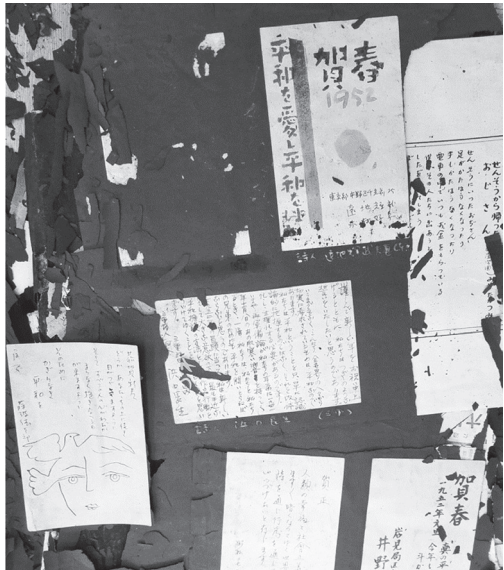
向井はこの後、「同盟」という言葉のものものしさについても触れ、「主義主張、新しいエコールとしての自覚をはじめからもつ」集団であることを強調している。向井の言葉通り、IOMは当初から厳格な規約を設けていた。定期研究会には必ず参加すること、機関誌『IOM』の発行は絶対に月刊のペースを守ること、他のグループとかけもちする場合でもIOMの活動を第一義とすること、などであり、詩の方法論の上でも「歌う詩から描く詩へ」という写実への志向を明確に掲げていた。

もともと、山口英（1921-2007）とともに大阪で句誌『濤』（1937）、『鬼』（1938）を

営んでいた向井が、戦後に俳句から現代詩へと方向転換したことや、上の世代の大塚徹(1908-1976)らと創刊した『新濤』(1946)を内部から批判してIOM同盟を立ち上げたことは、こうした新たな詩運動への意識に基づいている。向井・山口の二人に、姫路出身の柳井秀(1922-1992)を加えた3人を発足以来の中心メンバーとして、1952～1953年の時点ではおおよそ8人の体制であった²。彼らの理論と実作が、戦後詩としてどのような達成を見せたかについては興味深い課題であるが、まずは本資料に直接関係する活動を追いたい。次に引用するのは、後年の柳井秀による回想である。

「同盟は詩誌発行とあわせてユニークな反戦平和運動も展開した。それは当時としては珍しい行事の一つで、全国の有名文化人や文学者、良心的政治家、作家詩人などに呼びかけ、年賀状や暑中見舞いに反戦平和の決意や祈りをこめた言葉や作品を書いてもらい、それをパネルに張り付けて人通りの多い街頭に展示して観客に見てもらうという運動である。私たちは毎月(引用者注—毎年¹の誤りか)一月と八月にそれをやった。一九五二年一月には約四百通の賀状が集まったが、そのうち主だった人たち三百人分を街頭展示した。末川博、市川白弦、清水幾太郎、小田切秀雄、竹内好、壺井繁治、淡海二郎、大山郁夫、羽仁五郎、国分一太郎、野間弘、丸木位里、柳田謙十郎、吉野源三郎、風見章、壺井栄、阿部知二、戒能通孝、赤松俊子など多くの有名人がふくまれていた。(略)展示板は十枚で、姫路を皮切りに、相生、尼崎、神戸で展示され、通算して二万人の観客があった。」(安藤礼二郎「『IOM』同盟の概説」(『焼け跡のルネッサンス：昭和二十年代播磨の文学活動'91 播磨文芸祭』姫路文学館1991年11月)³

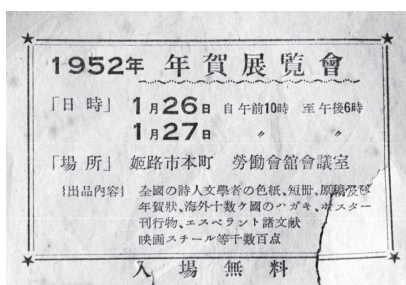
ここで柳井が振り返っているのは1952年1月26・27日にIOM同盟が主宰した「年賀展覧会」ないし「年賀はがき展」(於・姫路市労働会館)のことであると思われる⁴。本資料の原型はこの時の展示資料と見て間違いない。写真【1-①】のように、本資料には、通信面が見える形で黒い台紙に貼りつけられたハガキ群(年賀状や暑中見舞い状)が多く含まれるのだが、1952年の年賀状よりも古いものは見当たらないからである。写真【1-①】の右上の一枚には遠地輝武・木村好子夫妻、中央の一枚には浜口長生の名が見え、いずれも差出人の名前と居住地が模造紙の方にも直に書き込まれている。特に居住地を書き出すのは、この運動が全国的な展開であることを強調するためだろうか。後述するように、IOM同盟は姫路を活動の拠点としながらも、メンバーや関係者



写真【1-①】右上に「詩人・遠地輝武夫妻(東京)」、中央に「詩人・浜口長生(三重)」の年賀状。
[論考1-田口]

の人脈を最大限に活用して実に様々な場所からの来信を集めている。また、写真【1-②】は、本資料の保管者であった宮田千秋氏の旧蔵資料の中から見つかった、この展示の招待券代わりと思しい数センチ四方のフライヤーである。他のグループと活動情報や同人詩誌を送り合う中で、展覧会の観覧者と同時に、展示するハガキの提供者もまた広く募っていったものと思われる。

ただ、柳井の言うように1952年1月の時点で賀状300枚を展示したのだとすれば、今回確認された52年の年賀状73枚とは大きな差がある。この点については、展示イベントを重ねるごとに既出のハガキを精選して枚数を減じ、一方で新たな賀状・暑中見舞い状を追加していったと考えるのが最も自然だろう。「はじめに」でも述べたように本資料には、52年の年賀状と同年の暑中見舞い状、翌53年の年賀状が確認されている。本資料のなかで最も新しいのは1953年の年賀状であることから、原則的に1月と8月の開催であったとすれば、本資料は53年1月の展示形態であると思しい。しかし、それまでの展示形態を留めつつも局所的に改変が加えられていったとすれば、その段階的な変遷を跡づけることは難しい。また後掲するように、IOM 同盟とは別組織である神戸大学姫路分校自治会主催の「原爆展」⁵（1953年4月28日～5月1日、会期5日間、於・姫路労働会館、以下「姫路原爆展」と記す）の展示資料が酷似した形態で混ざっていることも、本資料の全体像を分かりにくくしている。ただ、プレスコードの失効と原水禁運動の高潮を背景として、初発の「年賀展覧会」が「原爆展」としての性格を強めながら展開されていったであろうことは想像に難くない。とりわけ暑中見舞い状は、原爆投下の時節と重なっているため、その被害に特化した言及も当然多くなったろう。次節以降で、その経過について検討してみたい。



写真【1-②】「1952年 年賀展覧会」招待券 [論考1-田口]

詩歌原稿展から街頭原爆展へ

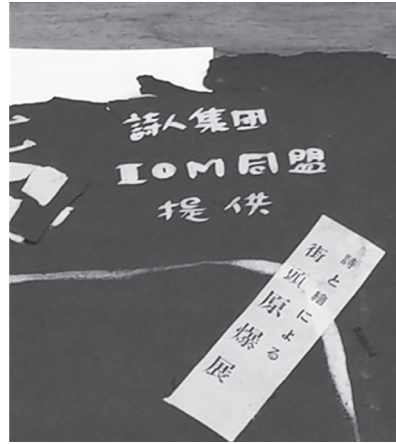
先に述べた「年賀展覧会」に継いで、1952年9月15日には「反戦平和のための詩歌原稿展」（於・姫路市ヤマトヤシキ百貨店）が開催されたことが、数少ない詩の全国誌である『詩学』誌上に報告されている⁶。写真【2-①】には、「反戦平和のための詩歌原稿展、及び暑中見舞展」という題字が確認できるので、ここでは詩作品を書きつけた原稿類とともに、52年の暑中見舞い状が新たに展示されたはずである。そして同じ模造紙の右端に「詩



写真【2-①】 [論考1-田口]

と絵による街頭原爆展」(【2-②】)という紙片が貼り付けられているの見える。おそらく展示パネルの冒頭に位置する一枚だが、後者のタイトルが後付けであることは形態から明らかに察せられるので、「反戦平和のための詩歌原稿展及び暑中見舞展」が、時を置かず「詩と絵による街頭原爆展」として再展示されたとまずは推測できる。

本資料についての有力な記録として、市川宏三(1929-)が『群』⁷(姫路市手をつなぐ会)3号(1952年12月)に次のような記事を残している。



写真【2-②】[論考1-田口]

「人類愛善会姫路支部有志及び詩人集団 IOM 同盟共催による「絵と詩による街頭原爆展」は九日午前十一時から本町・姫路郵便局前で開催、夜は夕涼みの客を相手に同広場中央に移動、十日には大本姫路青年会による幻燈会。十一日にはヤマトヤシキ(百貨店)前で街頭展。延べ二万人が鑑賞した。」

この記録によると、「詩と絵による街頭原爆展」は大本教の活動組織との共催である。【写真2-②】の通りこの「街頭原爆展」の題字が小さな紙片を糊付けする形で貼り添えられている以上、IOM 同盟がそれまで単独で主催し展示してきた内容をそこに流用したと考えれば自然である。ただし、この『群』3号の記録は、開催月の記載を欠いているのだが、「夕涼み」という言葉が不自然でないのは8月か、後ろ倒しにしても9月までであろう。そうすると、9月15日の開催として報告された「反戦平和のための詩歌原稿展」は、「街頭原爆展」よりも後の開催でなければおかしい。またそもそも、9月の展示として「暑中見舞展」がやや時宜を逸している点も気にかかる。これらを勘案すると、『詩学』誌上に報告された詩歌原稿展と、写真【2-①】が用いられた展示はほぼ同じタイトルであっても別内容である可能性も高い。あるいは、もともと8月に開催された「反戦平和のための詩歌原稿展及び暑中見舞展」が、大本教との共催イベントで同月に再び展示され、さらに9月にもう一度展示されたものだろうか。同じ開催地で、数か月の間に同じ趣旨の展示を複数回行い、毎回少しずつ内容を増強して相応の反応を得ていたとすれば、これらの街頭展示活動の勢いと、反戦活動に対する公衆の関心の高さがうかがわれよう。ともあれ、同年夏の間に複数回展示されたと思しい【写真2-①】の内容を見てみよう。

「八月六日朝、私はふしぎなハガキを受取りました。あるいは皆さんのところへも届けられているかも知れませんが、ここに一部を抄出します。私はこのハガキを受取ってからこの暑い耐えがたい夏が、むしろ感動すべき平和な涼さ■あることを知りました。(後略、■は判読不明)」

「私」=向井孝は、このような前置きの後、「暑中お伺い申し上げます。・・・しかし

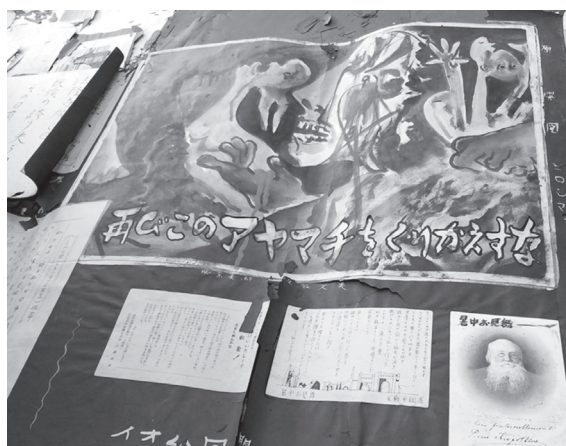
あなたがあついあついとおっしゃる、この夏の温度はどの位なの
ででしょうか。」と、生者に問いかける死者の語りを配置している。
「私達」は「摂氏六〇〇〇度乃至九〇〇〇度の熱に焼かれ」たのだ、
それを「片時も忘れず、おぼえていて下さい」と訴える一枚の
暑中見舞い状が、8月6日の朝に死者から届くという設定のもと、
その幻の一枚と並べるようにして、各地から届いた暑中見舞い
状が展示されたことになる。写真【2-③】が、その幻のハガキ
の差出人の署名である。

「死者同盟一同」という集団を仮構することの粗暴さや強引さ
について、またそのように設定された「私達」から発せられる脅
迫的で目的論的なメッセージのあり方について（もし「わたし達」
のことを忘れてたら、再び「きのご雲」が立ち昇り、「あなたはや
けただけ、血を流し、ねんど細工のようにふくれ上り、どろど
ろとろけて死に絶えるのです」等とある）考えたとき、ここに
現われているのが、死者が生者に語りかけるという見かけ上の趣向とは裏腹に、もとも
と生者の論理のみで続べられ手段化された言葉の様態であることは否めない。だがおそ
らく、「私」や「私達」の間の断層に躓く余地もないほど一元的な力強さで「同盟」の
締結を使喉するこの語り口こそ、ここで向井が演出したかったものだ。実際に、この幻
の暑中見舞い状の文言のすぐ隣に配置されているのは、新聞あるいは雑誌に寄稿されたら
しい向井の記事「広島市民に訴える」（初出不明）の切り抜きであるが、広島市民に
向けて「どうか皆さん」「語り伝えて下さい」「自らに義務づけて下さい」と強い調子で
奮起を促す向井の口吻は、上に確認したような、仮構された「原爆死者同盟一同」の語
りと酷似している。多くの困難を抱えた被爆地の市民に対し一層の当事者的自覚を要求
するような、あるいは「原爆死者同盟」なる犠牲者の口寄せを行うようにして観る者に
強く応答を迫るような、ある種無制限であるゆえに強力なこの発話の位置が、全国的動
向にさきがけて反戦・反核の気運の一端を牽引していったと言えるだろう。

また IOM 同盟の展示が原爆展と
密着しながら発展する一方、自ら
が「詩人集団」であることを根幹に
据えようとしていた様子は、【写真
3-①】の資料配置に象徴的に表れ
ている。【写真3-①】は、美術家
の板家久美の手になると思しい「原
爆図ヒロシマ」と題された一枚だ
が、その左下に少しばかり重ねる
ようにして「(IOM 同盟一九五二年大
会) 抜萃」という手書きの原稿が
掲出されている。「詩こそ、その本
来の機能によって、牢固として人々
の心裡にすくう古い感性とその秩

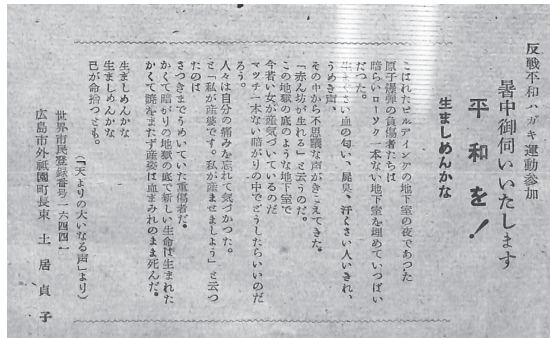


写真【2-③】[論考
1-田口]



写真【3-①】「原爆図ヒロシマ」、下に「商業美術 板
家久美」の名がある。[論考1-田口]

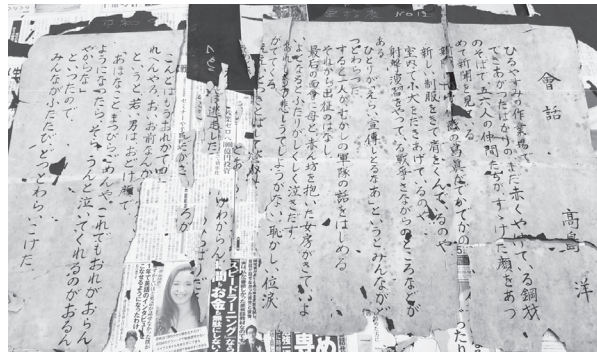
序をうち破り、反動と破壊に抵抗し、自由と平和を守るために人民の創意をみちびきだすべきものであることを、今や詩人たちは大衆の先頭に立って実証すべきときです」。この宣言のすぐ右に、広島市の文化運動を牽引する詩人・土居貞子(栗原貞子)からのハガキが置かれているのは無論偶然ではないだろう。【写真3-①】の



【写真3-②】土居貞子からのハガキ [論考1-田口]

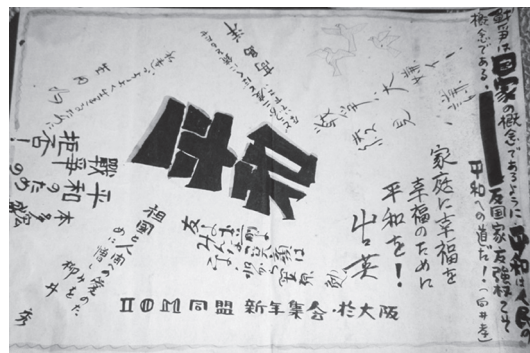
下方左の土居からのハガキには、「反戦平和ハガキ運動参加」という文言とともに、自身の代表作「生ましめんかな」が全文掲出されている(【写真3-②】)。詩によって人民の抵抗を導くという指針が、IOM同盟によってどのように実践されたのかについては、また後節で追ってみたい。

なお上記のパネルと並べて展示されたハガキ群の宛先は、向井孝を筆頭にほぼIOMの各メンバー宛てか、グループとしての「IOM同盟」宛てだが、「内海繁」や「黒川録朗」、「姫路映画サークル協議会」宛なども少なくない(本稿末尾の目録を参照)。内海繁(1909-1986)は、阿部知二とともに戦後の姫路の文化運動の中心に位置した人物であり、後述する城ペンクラブの活動などでIOMの面々と協働する局面も多かった(一時期IOM同盟に加盟していたとも言う⁸⁾)。また「良い映画を安く見る運動」を掲げた姫路映画サークル協議会は、1950年8月設立。城ペンクラブ立ち上げに尽力した黒川録朗や、ヤマトヤシキ百貨店に勤める内海章三が副会長に就いていた。IOM同盟を中心に、関係者がそれぞれの人脈に幅広くハガキでの来信を呼びかけたことがうかがえる。



【写真4-①】高島洋「会話」展示原稿 [論考1-田口]

この街頭展を観覧している市川宏三は、後に出品作品について「メモで見る限り『IOM』所属は生田均だけ。(中略) 峠三吉「呼びかけ」・生田均「女」・原民喜「水を下さい」・松尾敦之「原子爆弾の跡」・内海繁「原爆記念日に」の五作をかいているが、もっとあったような気がする。あるいは好評に乗ってふやしたのかな。」と述懐している⁹⁾。実際は、生田以外のIOMのメンバーも出品しており(例:写真【4-①】、【4-②】、また後掲する【論考2-図版2】)、全体の作



【写真4-②】イオム同盟新年集會寄せ書き [論考1-田口]

品数も市川のメモよりはずっと多い（市川のメモに残る生田均の詩「女」は、模造紙に直接書きつけられており、末尾に「反戦平和のための詩歌原稿展 No.13」の表記がある）。重要なのは、これらの展示資料が県外各地を巡回したらしいことである。市川の言うように、その過程で展示資料が拡充された可能性もあろう。

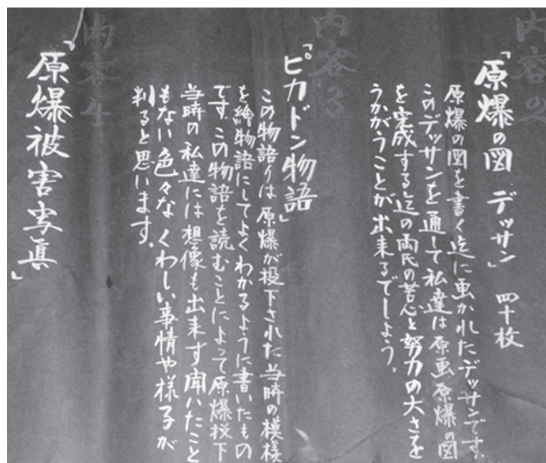
柳井秀もまた、先に引用した文章に続いて、1954年8月の「眼で見るビキニの灰街頭展」の開催に触れ、これに関しては「広島、四国、九州などの詩人グループや平和団体に大事に受け継がれ、各地で展示されていった」と述べている。本資料が広島県下で保管されていたことを考えると、これらの資料もまた西日本への巡回のルートに乗ったのかもしれない。そして姫路に戻る事がなかったために、「ビキニの灰街頭展」とは接続せず、53年1月までの展示形態が残されることとなったと推測できよう。

姫路原爆展と城ペンクラブ

では、この街頭原爆展と、神戸大学姫路分校¹⁰の学生主催の原爆展（姫路原爆展）はどういう関係にあるのだろうか。写真【5—①】は開催を予告する掲示物だが、上掲の資料群と素材や形状が酷似しており、主催者間の人的な繋がりを思わせる。前者の会期は1952年8月および9月、後者は1953年4月28日～5月1日の4日間であるから、もともと同時開催でないことは確かであるが、姫路原爆展の開催に合わせて、53年の年賀状を加えた本資料の最終形態と一緒に展示されたことは大いに考え得るし、運営に関わったスタッフ間に密な関係性があつた可能性も高いだろう。また写真【5—②】によると、姫路原爆展は丸木位里・赤松俊子による「原爆の図」のデッサン40枚（内容2）、「ピカドン物語」¹¹（内容3）、原爆被害写真（内容4）を含むものであり、丸木夫妻の原爆の図を目玉とする「原爆の図展」であったことが分かる（「内容1」を紹介する資料は失われているが、連作「原爆の図」の解説が施されていたと推



写真【5—①】原爆展開催の予告【論考1—田口】



写真【5—②】原爆展内容の予告【論考1—田口】

測できよう¹²⁾。従って本資料の中には、姫路原爆展を構成した中心的な資料は残されていないだろう。ただし、神戸大学にはこの原爆展の感想文集「はらからの叫び 姫路原爆展感想文集」(図版神大自治会・姫路平和を守る会準備会、1953年7月20日発行)が残されていることが分かった。それによると観覧者は「七千余人」、回収された感想文から見ると「学生が最も多く、小・中・高・大各学を合せて百三十枚、次いで[以下一行分、判読不明]四十三枚、労働者三十一枚、特に保安隊員の五枚に其の他階層不明六十二枚という内訳」になり、「無職の老人、主婦、療養患者や中国帰国者等が含まれて」と報告されている。

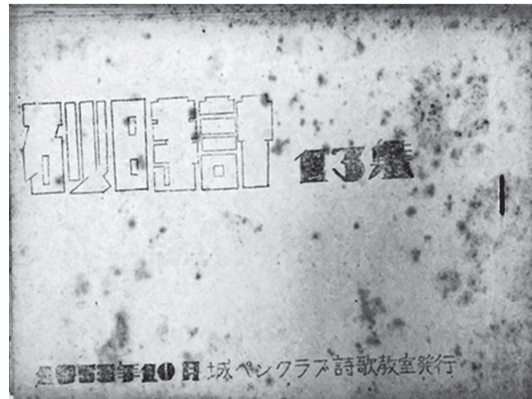
では、この感想文集の記録およびその他の資料に従って、IOM 同盟と神大自治会の学生たちとの接点を、とりわけ詩という表現形態に着目した上で探してみたい。IOM 同盟の活動にとっても、原爆の図展にとっても、詩的言語のメディア性は一貫して重要なファクターであったからである。

文集には、原爆展準備委員長として伊藤昭、委員に高山欽史、尾末満といった名前が見えるが、このうち尾末という学生はおそらく、詩歌展であり反戦平和展であるという IOM 同盟の展示活動と直接的に共振したスタッフの一人だったのではないかと思われる。尾末は、自治会の機関誌『自治会雑誌』にも「壁・床・音」などの長編詩を発表しており¹³⁾、向井たちが講師を務めた市民講座「城ペン詩歌教室」でも注目株の一人であったことが、いくつかの資料からうかがえる。

城ペンクラブは、戦後の一時期姫路に居を構えていた阿部知二と、内海繁ら郷土の文化人との結びつきによって発足した姫路文化連盟¹⁴⁾を母胎とし、黒川録朗が経営するレストラン「三松」を事務所として1949年10月に結成された文化団体である。姫路市史編集専門委員会編『姫路市史』の表現によれば、ほどなく東京へ戻ることになる阿部の「置き土産」であり、市民文化祭としての「城ペン祭」は「思想や立場の壁を越え、文学や芸術に携わる人々が大同団結して行われるお祭り」¹⁵⁾として盛況を見せたという。この城ペンクラブが、1951年7月より開設したのが「城ペン詩歌教室」であり、IOM 同盟のメンバーたちが講師として登壇している。向井が、この詩歌教室について「[IOM]の年賀展をやったあとで、それをみた人講演をききにきた人などを集めて毎日新聞支局の応接でやりはじめた」と述べている¹⁶⁾のは、内海ら年長世代が牽引するばかりでなく、IOMの詩と詩論への興味から教室へ来る有力な層が存在したことを示唆しているのだろう。尾末はそのなかの一人だったのではないか。城ペン詩歌教室の機関誌『砂時計』において、向井はそこ



姫路原爆展感想文集表紙【論考1-田口】



城ペンクラブ詩歌教室発行『砂時計』13集表紙【論考1-田口】

に収録された尾末の詩を「出色」¹⁷と評している。尾末の詩篇「ゆきだおれ」を一部引用しよう。

おむねは歩いた 歩きつづけた／灯を欲しがる人殺しの心で軒から軒へわたつて
いつた／足がじゅくじゅく泥にめりこみ雨がよこしまにふところへ吹きこんだ／
川沿いの道で一度膝をつき／畦みちではつたり横ざまにころんだ／／けれどもお
むねは起きあがつた／雨足がおむねをとりまきいなすまがおむねをおどした。／け
れどおむねは歩きつづけた／体が燃えるように熱くなり、灯がいくつも動いて見え
た。／もう間近かに軒が見えあの子が待つてる……………

尾末満 〈ゆきだおれ〉部分

『砂時計』第13集に掲載された尾末のこの作品は、貧しい行商の女性の死を描いた掌編であるが、引用部だけを見ても、厳しい風雨にさらされながら憑かれたように歩く「おむね」の追い詰められた境遇が、切迫感のある短いセンテンスを重ねながら臨場的に描き出されている。これを含め、このとき向井が好意的に言及した詩篇がすべて「物語性のある、長い詩」であったのは偶然ではない。「作者がその素材にほれこまず、(感傷にながれず)自分がその作品によって意図しようとする情緒に自らおぼれず、よく自制して、第三者にもよく感取されるような客観的描写をしていること」¹⁸——これが向井の言う「よい詩」の条件であり、IOM 同盟はそれを強く推進することによって、関西における戦後詩の重要な一角を形成したグループであった。尾末の作品については確認できるものが限られているが、『自治会雑誌』に発表した先述の「壁・床・音」その他がいずれも抽象的観念の世界であったことを思うと、「ゆきだおれ」が描写的に対象へ肉薄する方法論へ大きく傾斜したことは確かだろう。向井たちに続こうとしたこのような若手の存在もまた、おそらく姫路原爆展を下支えしていたのである。

最後に

前節では、IOM 同盟と姫路原爆展との接合部にいた一人と思われる尾末満の詩を取り上げたが、それでは、肝心のIOM 同盟のメンバーたちは実質的にどのような作品をものし、その理論に照らしてどこまでの達成を見せたのだろうか。本稿は、目の前に残された街頭展示会の痕跡をもとに、その試みの複雑な形成過程や、それを支える人的ネットワークを掘り下げることが目的とするものであり、遺憾ながらIOM 同盟の詩作そのものに深く切り込んでいく余裕は残されていない。しかしながら、IOM 同盟の街頭展示の試みが、必ずしも狭い意味合いで彼らと共闘する人々だけでなく、関係者から関係者へと派生的に広がりながら多くの表現者を巻き込んでいったことは、向後の研究者が彼らの詩作品を考察しようとする局面においても重要な参照事項となるだろう。思想的な立場の差異を時として鮮明に打ち出しながらも、戦後詩人たちは、何よりも同時代人と対話し、表現の場を同じくすることへの強い志向性を共有していた。本資料はまさにそのような共同性への志向を可視的に示すものであると言えよう。

注

- 1 座談会「関西の詩の動き」『詩と真実』1巻7号(1953年9月) なおIOM同盟については、戦後の詩人を多く立項する方針をとった『現代詩大事典』(三省堂、2008年)等にも関連記述がなく、目下研究者による研究が進んでいないが、運動体としての波及力や叙事詩の推進を担った点など、関西の戦後詩の展開において逸することのできない役割を果たしたグループと言えるだろう。
- 2 ただしメンバーは入れ替わりも多かったようで、後掲する写真【4—②】の色紙に8名の連署があるものの、資料によって異同も多く、1952年9月の展示会場での写真(注6)の8人とも異なっている。
- 3 安藤礼二郎、柳井秀、平柳秀三はすべて柳井秀一の別名。本稿では1951～53年当時の署名に合わせて「柳井秀」で統一する。なおここで柳井が名を挙げている「有名人」からのハガキについて、本資料の中にすべては確認できなかった。
- 4 毎日新聞(兵庫版)の1952年1月26日の紙面には「年賀はがき展」としてこのイベントのことが告知されており、写真【1—②】の招待券には「年賀展覧会」と記されている。
- 5 岡村幸宣『《原爆の図》全国巡回 占領下、100万人が観た!』(新宿書房、2015年)では、精緻な調査により《原爆の図》国内巡回の記録が年表化されている。このうち「証言が寄せられたものの、開催時期等が不明であったり、裏付となる記録が確認できなかったりという理由で一覧表に掲載できなかったもの」のひとつに50年代はじめの「姫路市労働会館」における展示が挙げられている。本資料が、当該の展示の存在を裏付ける資料であることは間違いない。
- 6 『詩学』1952年10月号の〈詩界通信〉欄に「反戦平和のための詩稿展」(IOM同盟主催、於・やまとデパート、新日本文学姫路支部共催)の報告があり、同11月号には「反戦平和のための詩歌原稿展」展示会場と関係者8人の写真が掲載されている。写っているのは成瀬純、向井孝、内海繁、生田均、高島洋、柳井秀、山口英、綾見謙。10月号、11月号ともに開催日の記載は9月15日。
- 7 『群』は鳳眞治・渡辺絢三・菊池雄三らによる。1952年10月創刊。
- 8 市川宏三『たゆらぎ山に鷺群れて——播磨の文化運動物語』(北星社、2007年)
- 9 注8
- 10 旧制姫路高等学校は、1949年5月に神戸大学に統合、1964年8月に廃止されるまで姫路分校として教養課程を受け持った。
- 11 幻灯版『ピカドン——広島原爆物語』(1952年4月～6月制作、プロダクション星映社、日本光芸株式会社提供)か。
- 12 毎日新聞兵庫版の4月27日および5月1日の紙面にこの原爆展に関わる記事があるが、そのうち5月1日の記事「原爆の図を見て——各層の感想を聞く」の中に、「火・水・虹・少年少女・幽霊の五部作」が展示されたと記されている。
- 13 神戸大学姫路分校学生自治会『自治会雑誌』第二号(1952年12月)所収。
- 14 1945年10月ないし11月発足。
- 15 森本穂「文芸運動の復興」(『姫路市史』第6巻・近現代3・第一章二節・4、姫路市、2016年)

16 注 1

17 向井孝「よい詩わるい詩」『砂時計』13 集 (1953 年 10 月)

18 注 17

【論考 2】 展示資料に現れる「朝鮮」のスペースと在日朝鮮人運動の関わり

(逆井聡人)

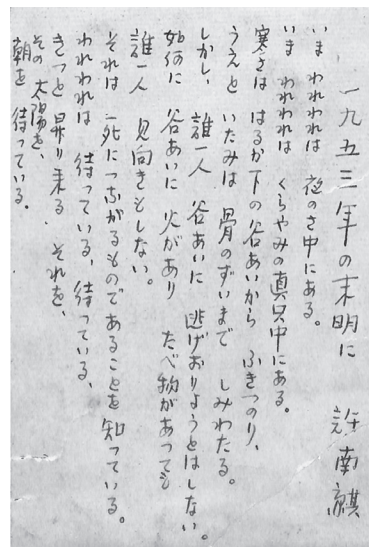
はじめに

本稿では、街頭ハガキ展、「反戦平和のための詩歌原稿展」および「姫路原爆展」の展示資料の背景として、1950 年代初頭に展開された文化運動への在日朝鮮人作家の関わりについて述べてみたい。本稿で注目するのは当該展示資料の中での朝鮮をめぐる言葉とイメージである。「祖国の中の異国」と題されたセクション (図 1)、IOM 同盟の発足メンバーの一人である柳井秀の詩「農兵 (ニュース映画朝鮮戦線より)」 (図 2) や在日朝鮮人詩人・許南麒の詩が書かれた年賀ハガキ (図 3)¹ などに直接的に見られるように、この展示に関わる人々にとって、朝鮮戦争への意識とそれへの抵抗のための連帯は共有された前提として現れている。

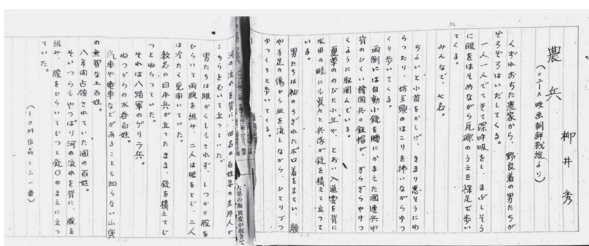
以下では、なぜ 1950 年台前半の文化運動、とりわけ「辻詩・壁詩」のような詩的言語が積極的に公衆と関わっていくことを目指した運動に「朝鮮」が重要な要素であったかを、在日朝鮮人運動と詩人・許南麒の同時代的評価を概括した上で述べていきたい。



【図 1】 「祖国の中の異国」 [論考 2—逆井]



【図 3】 許南麒 1953 年賀状 [論考 2—逆井]



【図 2】 柳井秀「農兵 (ニュース映画朝鮮戦線より)」 [論考 2—逆井]

在日朝鮮人運動の展開

在日朝鮮人運動と1950年代の文化運動との関わりを考える上で、まず遑らなくてはいけないのは、最終的には1949年9月に日本政府によって出された在日本朝鮮人連盟(朝連)の解散命令に到る解放直後からの在日朝鮮人運動の経緯であろう。

1945年8月の日本敗戦時点において、在日する朝鮮人の人口は約220万人とされ、日本政府がGHQの指示によって朝鮮人の「送還計画」が着手される1946年4月までの間に、すでに130万人の朝鮮人が自前で帰還手段を用意して本国に帰還したとされる²。しかし、いざ「送還計画」が実施される段になると、それを利用する朝鮮人の数は約8万人に過ぎなかった。これはGHQが朝鮮への引揚げにあたって、所持金や携行できる物資を制限したため、すでに日本に長年居住し幾らかの資産を持っていた定住者にとっては帰郷を躊躇する原因ともなった。また、朝鮮半島の政情不安や経済危機が伝わるにつれて、帰郷の決断ができず、延期せざるを得ない人々が続出したのも原因とされている³。結果的に、日本に留まらざるを得ない人々の数は約56万人に及んだ。

このような状況の中でも、在日朝鮮人は朝連を中心とした旺盛な民族運動を展開する。その運動の中心的な活動の一つとして母国語教育を基本とした民族教育が挙げられるであろう。朝連は解放直後からこの民族教育を統括管理・指導していくこととなり、さらに46年には小学校に加えて、中学校・師範学校も設立される。46年に開催された朝連第三回全国大会において、日本に在留する朝鮮人が50万人を越すことが確認されると、民族教育の活動方針はより恒久的に持続するものとして再編された⁴。

このような朝鮮人たちの動きに対して、文部省学校教育長は47年4月時点で朝鮮学校を学校として認めることに差支えないと各都道府県に対して回答をしていた。しかし、10月になるとGHQ民間情報局(CIE)は「朝鮮人諸学校は正規の教科の追加科目として朝鮮語を教えることを許されるとの例外を認める外は日本(文部省)のすべての指令に従わしめるよう日本政府に指令する」との通告を出し、朝鮮語教育は課外で行われる以外では、これを許可しなかった。また、そのGHQの方針転換を受けて日本政府は教育基本法・学校教育法の規定によって民族の歴史・文化に関する授業は「政治教育」と見なし、事実上朝鮮人学校が存在理由を否定することとなった。

朝連は上の通告に対して抗議活動を展開し、48年4月23日以降、大阪・神戸においてそれぞれ数万人規模の抗議集会が開かれたが、GHQは24日に占領下で初めての「非常事態宣言」が発令し、GHQに主導された武装警察は抗議活動への強制鎮圧を試みた。この朝鮮人による抗議行動(阪神教育闘争)は、多大な朝鮮人側の犠牲を出しながらも最終的には、日本政府が朝連の民族教育を認め、また朝鮮学校も日本の教育法が定める義務教育を行うという歩み寄りの形で決着することになった。しかしながら、翌年の9月には在日朝鮮人の日本における生活権確保のための運動を統括していた朝連自体が解散させられ、さらに10月には朝鮮人学校の強制閉鎖にまで発展した。

結果的には、教育闘争における朝鮮人たちの強固な抵抗が、より暴力的で徹底的な在日朝鮮人への弾圧の呼び水になってしまったのであるが、この教育闘争から朝連の解散の中で起こったことは、二つの点で1950年代初頭の戦後文化運動と強く結びつくこととなる。

第一に、在日朝鮮人運動が日本共産党に組織的に合流していくことになるという点である。既に、解放直後において日本共産党内部に朝鮮人部が置かれ、朝連幹部の多くも共産党員として活動していたが、朝連の解散以降は共産党に朝鮮人が大量に入党することが行われた⁵。それに伴い共産党内の朝鮮人部は、民族対策部（民対）として再編されることとなった。朝連が存在していた頃には共産党と朝鮮人は相互関係であったのが、この再編によって朝鮮人の集団が下部組織として位置付け直されることを意味し、後で述べる「50年問題」以降、朝鮮人が共産党の細胞運動の実動部隊として目され、また火炎瓶闘争や山村工作隊などの実力行使を伴った闘争に駆り出されることの構造的な理由となる。

第二の点は、朝連の運動において民族教育が担ってきた役割が、文学の大衆化という運動と連動していたことである。1947年2月に、金達寿、金元基、張斗植、朴元俊、許南麒らを中心に在日本朝鮮文学者が結成されるが、この綱領の中に「文学の大衆化」という項目がある。これは朝鮮半島で結成された朝鮮文学者同盟の綱領にはない一項目であるが、宋恵媛はこの項目が付け加えられた理由を「文化と縁のない生活を送っていた日本在住の朝鮮人たちの実情を反映したもの」としている⁶。このように、朝連文化部所属メンバーを中心とした文学者たちによる初期の文学活動は在日コミュニティの人々への文化教育も兼ねており、その実績が1950年以後の戦後文化運動の先鞭として参照されるようになる。

この二つの点は、一面では在日朝鮮人が共産党主導の運動に「利用」されたという否定的な評価がなされる事態ではあるが、もう一方で日本人の左派知識人たちから「民族解放の先駆者たち」と賞賛された理由でもある。

雑誌『人民文学』と国民文学論争

1950年1月、ソ連コミンフォルムの機関誌に「日本の情勢について」と題された論考が発表された。これは日本共産党の「平和革命路線」批判であり、その是非を巡って共産党が二派に分裂するという抗争、いわゆる「50年問題」が起こった。この分裂は文学者にも影響し、徳田球一・野坂参三といった日本共産党主流派が構成する「所感」派を支持する江間修・徳永直・岩上順一等が雑誌『人民文学』を創刊する。一方、コミンフォルムへの共感を表明する宮本顕治・蔵原惟人らの国際派と歩みを共にする中野重治・宮本百合子・小田切秀雄等をはじめとした雑誌『新日本文学』が対立することとなる。

在日朝鮮人の文学者たちもこの分裂に巻き込まれることを余儀なくされ、当時日本の文壇にも注目されていた金達寿や許南麒もそれぞれ国際派、所感派と歩みを共にしていくことになった。ただし、既に述べたように朝連解散後は朝鮮人運動家たちが共産党の下部組織に編入されていたために、多くは主流である所感派の細胞として行動することとなった。

51年2月の日本共産党第4回全国協議会（四全協）において、実力闘争を進めることが「軍事方針」によって正式に決定され、また在日朝鮮人は「在日少数民族」と見られ日本の革命運動の一翼として位置付けられた。そのために朝鮮人たちが実力闘争の先

頭に立つことが多かったが、これも先に述べたように、ただ受動的に利用され振り回されたというだけでなく、主体的に運動を導く役割も担っていた。在日朝鮮人運動史家の文京洙は、この頃は「中国革命を震源地とする反帝民族革命の高揚期」であり日本共産党の実力闘争も「東アジア全体の革命運動の文脈に位置付けられていた」と論じている⁷。在日朝鮮人の存在は金日成率いる朝鮮労働党との結びつきの中で目されており、英雄的な行動が期待され、また彼らもまたその期待を内面化していたために、より前面に出ることが助長されたと言えるであろう。竹内恵美子も近年の著書のなかで日本民主主義文化連盟（文連）を中心とした民主主義陣営の知識人たちが在日朝鮮人の阪神教育闘争に対して強い関心を持っていたことを明らかにしている⁸。

そして、こうした東アジアにおける「民族革命」の潮流に感化されて出てきたのが「国民文学論」であり、先に紹介した雑誌『人民文学』がその中心的な舞台となる。ここで一度、「国民文学」というタームにどのような思想が含まれていたかを概観するために1952年の『日本読書新聞』誌上に掲載された竹内好と伊藤整の往復書簡を見てみたい。当時竹内も伊藤も共に『人民文学』周辺にいたわけではないが、この両者が注目を集め始めていた「国民文学」論のまとめ役を買って出る。この「新しき国民文学への道」と題された往復書簡において竹内は「国民文学」をめぐる問題は「日本人の生き方——民族の活路、という問題にかかわる」と述べ、大衆文学とエリート主義の純文学の隔たりを嘆き、その間を埋める国民文学の必要性を説いている。

ここで竹内が注意しているのは「国民文学」という言葉に「日本ロマン主義」的な「ファシズムの匂い」が付きまとい、敬遠する向きもあるとしているながらも、戦後の「国民文学」はアジアのナショナリズムの影響を受けるものだとしている。返答として伊藤整も「近代文明の中では価値なしとされている東洋思想からの強力な、根本的なヨーロッパ系文化構造の批判も必要」としており、それが「国民文学という新しい光」であるとする。

このやり取りで「国民文学」論の背景がある程度見えてくる。1950年代は冷戦構造が確立して行く過程で米ソのどちらかから支援を受けた旧植民地が独立を勝ち取っていった時期でもある。その際の独立運動を底支えたのが「民族」への希求であった。そのために『人民文学』周辺の日本人知識人たちはアジア諸国と連帯した日本の民族主義を想定し、その表現手段としての「国民文学」を構想したのだ。そして、この「国民文学」が向かうべき方向は「文学の大衆化」であり、また大衆が「国民（＝民族）」という自覚を持つことを促す文学のありようであった。

このように民族運動の先駆者と目された在日朝鮮人運動家たちの集団的な日本共産党への合流と「国民文学」概念の出現という二つの点が繋がるところに、ようやく当資料（街頭ハガキ展、「反戦平和のための詩歌原稿展」および「姫路原爆展」の展示資料）中の「朝鮮」という言葉が浮かび上がってくるのだ。

許南麒のポジショナリティ

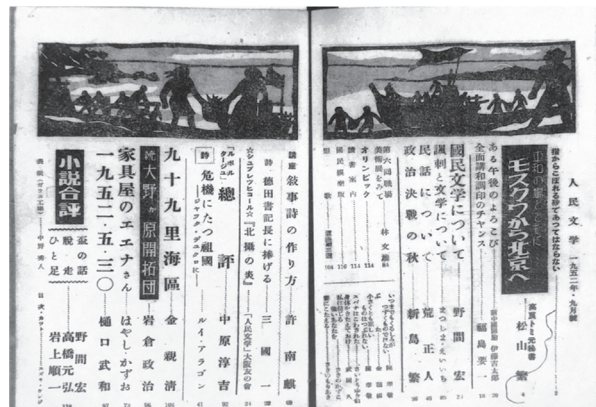
そしてまた、在日朝鮮人詩人・許南麒の詩が書かれた年賀状が1953年の展示に出

されることの意味も、この「国民文学」の文脈の中で考えられる。許南麒は既に1948年頃から中野重治によって彼の「朝鮮冬物語」（「朝鮮風物詩」として『民主朝鮮』に1948年1月から連載）が評価されていた⁹が、多くの日本人知識人たちから注目を浴びるようになるのは、彼の長篇叙事詩「火縄銃のうた」が雑誌『人民文化』発表された1951年5月以降になる¹⁰。52年に入ると訳詩集『朝鮮はいま戦いのさなかにある』（三一書房、2月）の出版や『火縄銃のうた』（8月）・『朝鮮冬物語』（9月）の文庫化、そして『叙事詩 巨済島』（9月）と出版が相次ぎ、52年末には許南麒の日本文壇における評価が固まったと見てよいであろう。高榮蘭はこの時期に許南麒への評価が日本文壇で高まった理由として、サンフランシスコ平和条約をめぐる議論の中で反米民族主義が掲げられ朝鮮民族との連帯が強調されたためと論じたが、この論も既に上で見た民族運動の先駆者としての朝鮮人像と符合する¹¹。

1952年9月号の『人民文学』（図4）では、野間宏による「国民文学について」という記事が掲載されており、ここで野間は先に挙げた竹内好と伊藤整の「国民文学」概念の整理を参照しながらも「まだ国民文学についての正しい展望を打ち出すことが出来たとはいえない」と述べている。その上で以下のような警鐘を鳴らす。

国民解放、それはナチス占領からフランス民族を解放し、また日本帝国主義から中国民族を解放した国民解放と同じように、アメリカ軍から日本民族を解放する戦いである。それ故に私たちの国民文学はこれらの国民解放文学がレジスタンス文学とよばれるように、あくまでもレジスタンス文学抵抗文学なのであり、このことを置いて国民文学を考えようとするとき、また私たちは全く道を失うことになるだろう。

野間は「レジスタンス文学」が未だ日本の文学界には現れていないことを述べるが、その野間の文章と同じ号に、許南麒の「講座 叙事詩の作り方」という文章が載っている。「講座」という言葉が示唆する通り、許南麒の叙事詩には国民文学のプロトタイプとしての役割が担わされており、「既に解放された民族から学ぶ」という体で目次が組まれていることが



【図4】『人民文学』1952年9月号目次〔論考2—逆井〕

分かる。また次号の『人民文学』には、神山彰一「国民文学の一試石 解説 巨済島」という文章が載っており、許南麒の叙事詩「巨済島」は、「それ（叙事詩）は、ただ真実をおそれぬもののみが、採用しうる創作活動であり、それはまた、われわれの『国民文学』、創造活動に対して、重要な示唆を与える方法なのだ」という評価がなされている。ここにまさに、民族運動の先駆者としての朝鮮人、そして国民文学の先駆者としての許南麒像が現れてくる。

また、1953年1月の岩波『文学』では「現代詩」という当時の詩壇の状況を総括するような特集が編まれているが、ここにも野間宏、鮎川信夫、金子光晴、関根宏などの名前と共に許南麒がおり、「詩ピラ・其他——民族詩の問題の一つとして——」というエッセイを寄稿している。この中で許南麒は、茨城県高萩で活動する「高萩詩人集団」というサークルとの邂逅を語っている。彼らは経済的な理由でサークル誌が出せず、代わりに「ピラ詩」というものを作り近隣の家や職安の人に配るといった活動をしていた。しかし、「ピラ詩」が洗練された詩句でないことを不安に思った同人たちに許南麒は意見を求められたという。これに対し許南麒は「この仕事こそ人民の詩、日本の詩を作り上げる大きな基礎工事の一環である」と賞賛し励ましたというエピソードを紹介する。その上で許南麒は「国民文学」を「民族文学」という言葉に置き換えて以下のように述べる。

いま、わたくしがここで言う「民族詩」と言う言葉は、いま日本で叫ばれている「国民文学」と言う言葉と同じい（ママ）意味を、ただわたくしの祖国である朝鮮で使われている術語で言ったに過ぎない。しかし、わたくしは「国民文学」とか「国民詩」と言う言葉よりも、「民族文学」「民族詩」と言った方がはるかに内容を正しく伝えているように思える。それは「民族」と言う言葉が、われわれ朝鮮人の耳には、「独立」とも「統一」とも「平和」とも「自由」とも聞こえるからである。

この文章全体からは、許南麒が当時盛んになっていたサークル詩人たちから指導者として見られていることが伺え、また彼自身もその期待に応えようとしている姿勢が見える。もちろんこれが、「日本人」と「朝鮮人」を切り離した上で、朝鮮人を既に「解放された民族」として捉えるような構図で成り立っている関係性であり、朝鮮戦争の最中にあり半島が分断されていることに対する朝鮮人の苦悩を後景に押しやるような効果を生み出していることには留意しなければならないだろう¹²。

しかし、許南麒がここであえて「民族」という言葉を持ち出して朝鮮人にとっての「独立」、「統一」、「平和」、「自由」という言葉を強調しているのは意味がある。それは、朝連が解散させられ、足場のない中で闘い続けなくてはならない在日朝鮮人たちの日本での位置を、岩波の『文学』という権威ある誌面上で改めて訴えかけることであろう。

おわりに

本稿では、街頭ハガキ展、「反戦平和のための詩歌原稿展」および「姫路原爆展」の展示資料に現れる「朝鮮」という言語空間がどのような政治的、また文学的力学を帯びているかを在日朝鮮人運動の展開と「国民文学」概念、そして許南麒の同時代的位置付けを見ることを通して考えてきた。

この展示資料は、在日朝鮮人が日本からの「解放」から朝鮮戦争に至るまで絶え間なく闘い続けてきた軌跡が裏張りされているように思える。その展示物の表面に現れた「朝鮮」のスペースは、既に解放を「達成した」民族として持ち上げられ、一方で日本での生活を安定させるために自らその評価の囲い込みの中に入り込んでいくことで確保され

たものであろう。この「朝鮮」のスペースが、草の根の運動家たちの作る模造紙の上
にまで現れたことは、複雑な思いを抱えながらも、やはり在日朝鮮人運動の一つの達成と
して評価しても良いのではないだろうか。

注

- 1 差出人と住所が不明なため、本人の筆かの判別が難しいが、本稿では許南麒の名前
と詩が提示されることの意味を考えていく。
- 2 西成田豊『在日朝鮮人の「世界」と「帝国」国家』東京大学出版会、1997年、334頁。
- 3 文京洙『在日朝鮮人問題の起源』クレイン、2007年、88頁。
- 4 梁永厚「解放後、民族教育の形成」『季刊三千里』1986年9月。
- 5 尹健次「在日朝鮮人運動と日本共産党」大里浩秋編『戦後日本と中国・朝鮮—プラ
ンゲ文庫を一つの手がかりとして』研究出版、2013年、21頁。
- 6 宋恵媛『「在日朝鮮人文学史」のために——声なき声のポリフォニー』岩波書店、
2014年、129頁。
- 7 文京洙「戦後60年と在日朝鮮人—“国民”の呪縛を超えて—」『思想』岩波書店、
2005年12月。
- 8 竹内恵美子『中野重治と戦後文化運動——デモクラシーのために』論創社、2015年。
- 9 中野重治「許南麒詩集『朝鮮冬物語』跋」『中野重治全集 第十九巻』筑摩書房、
1978年、初出は許南麒『朝鮮冬物語』朝日書房、1949年。
- 10 「火縄銃のうた」を高く評価した人物として歴史家の石母田正がいる（石母田正『歴
史と民族の発見——歴史学の課題と方法』東京大学出版、1952年）。
- 11 高榮蘭『「戦後」というイデオロギー ——歴史／記憶／文化』藤原書店、2010年、
290頁。
- 12 この構図に高榮蘭はこの時期の日本人による朝鮮人文学者評価の限界性を指摘して
いる（高榮蘭『「戦後」というイデオロギー』前掲、316頁）。

※本稿【論考1、2、および街頭ハガキ展（1952～1953）出品目録】には、JSPS 科研
費（16H07112）、（18K12291）および2019年度都留文科大学若手研究促進費の助成
を受けた研究成果が含まれている。資料閲覧に関しては、特に姫路文学館、神戸大学
大学文書史料室、兵庫県立図書館、姫路市立図書館の担当者各位に便宜を蒙って頂い
た。記して深謝申し上げる。

街頭ハガキ展 (1952~1953) 出品目録 (五十音順)

※詩誌名、グループ名が記載されている場合は差出人名の後に/を付して併記した。

※差出人住所は個人情報に配慮して市区町村の前半までとした。表記は原則として現物に従うが、町名・番地のみの記載の場合は都道府県および市区名の表記に直し括弧内に記した。

※展示の際の糊付けによって、ハガキ表面の一部または全部が確認不可能である場合も多い。住所や模造紙に書き込まれた情報によって高い確度で特定できる場合に限り、一部、差出人名を補い括弧内に記した。部分的に判読不能な箇所は■で示した。

差出人名	差出人住所	消印	宛先	差出人名	差出人住所	消印	宛先
[1952年元旦]				澤村経夫	(和歌山県東牟婁郡)	和歌山 宇久井	向井孝
生田均	赤穂郡	不明	柳井秀	島崎曙海	高知市	高知	生田均
石川三四郎	東京都世田谷区	千歳	生田均	(島崎曙海/ 詩人グループ 働く人)	記載なし	不明	向井孝
出海溪也	船橋市	東京中央	向井孝	杉藤二郎、 合屋みき	飯塚市	飯塚	生田均
井野慈彦	岩見局内	兵庫岩見	内海繁	須藤伸一/ JAP 同盟	東京都北区	赤羽	向井孝
井野滋彦	兵庫県岩見局区内	網于	向井孝	高島洋	神戸市	灘	柳井秀
入江亮太郎	東京都豊島区	落合長崎	向井孝	高橋玄一郎	不明	長■	向井孝
祝算之介	東京都新宿区	新宿	生田均	高橋宗近	東京都練馬区	■島	生田均
上田幸浩	■■市	不明	向井孝	田中伊佐夫	新潟市	新潟	向井孝
植村諦	東京都杉並区	杉並	向井孝	玉本格	神戸市	長田	向井孝
内海繁	姫路市	姫路	松井秀一	田村昌由	新潟市	不明	生田均
宇乃■■■	不明	兵庫・前ノ庄	黒川録朗	壺井繁治	東京都中野区	中野	生田均
大元清■■■	大阪市	東淀川	向井孝	壺井繁治、 壺井栄	不明	中野	内海繁
大沢美都夫	松本市	松本	向井孝	土井孝一	姫路市	姫路	内海繁
小笠原秀一郎	不明	左京	向井孝	永瀬清子	不明	不明	生田均
岡本潤	不明	板橋	生田均	直木惇郎	東京都豊島区	落合長崎	向井孝
小川正夫	あいち県ちた郡	尾張大野	向井孝	成瀬純/土曜詩人の会	神戸市	長田	向井孝
押切順三/ 北方自由詩人集団	秋田市	秋田	生田均	錦米次郎	不明	■坂	向井孝
小野連司	函館市	不明	向井孝	根■■■	記載なし	姫路	安田長久
遠地輝武	東京都中野区	中野	生田均	菱田知二	静岡県浜松局	浜松	向井孝
遠地輝武、 木村好子	東京都中野区	中野	内海繁	兵庫県職員 組合県庁支 部文化部映 画サークル	記載なし	神戸中央	姫路映画 サークル協 議会
鍵山博史	東京都杉並区	荻窪	生田均	副島智男	広島県海田市	不明	内海繁
蟹江真人	半田市	半田	向井孝	副島智男	広島県海田市	不明	生田均
川並秀雄	西宮市	西宮	内海繁	福原幸夫/ 駱駝同人	山口県徳山市	不明	不明
釘谷芳男	静岡県吉原市	不明	向井孝	藤本敏夫	(兵庫県) 養父群 ■■■八鹿	向井孝	向井孝
久保■	岡山市	岡山	生田均	藤本正彦	記載なし	鳳	向井孝
小池亮夫	なし	■■■屋中	生田均	眞壁仁	山形市	山形	生田均
後藤一夫/ 詩火社	浜松市	浜松	向井孝	増田恭人	広島県比婆郡	庄原	向井孝
近藤保雄/ 火星人クラブ	神戸市	神戸中央	若木正男	松井岩男	神戸市	神戸中央	黒川録朗
坂井志郎	兵庫県姫路市	不明	向井孝	森道出	渋谷区	■■■中央	向井孝
佐川英三	藤沢市	藤澤	生田均				
桜木俊子	大垣	不明	不明				
佐々木実	記載なし	京都中央	向井孝				

IOM 同盟を中心とする街頭ハガキ展、詩歌原稿展および
姫路原爆展をめぐる資料の整理と検証

差出人名	差出人住所	消印	宛先
八代俊雄	姫路市	姫路	内海繁
山口英	大阪市東住吉局区内	東住吉	柳井秀一、イオム御一同様
山之口雅／株式会社資料社	東京練馬区	不明	生田均
山本和夫	東京都北多摩郡	東京中央	生田均
吉村まさとし	東京都杉並区	芝	イオム同盟
渡辺絢三	姫路市	姫路	三松食堂城ペンクラブ
■■俊■	(姫路市)北條鉄道公■	姫路	内海繁
■■徳■郎	なし	長田	IOM 同盟
■■克彦	福知山市	福知山	向井孝
(たつお)	不明	相生	内海繁
不明	不明	不明	小黒
【1952年夏】			
差出人名	差出人住所	消印	宛先
アナキスト連盟	不明	不明	不明
アナキスト連盟	不明	不明	不明
磯永秀雄	山口県光市	不明	向井孝
内田豊清	神戸市	不明	向井孝
鳳眞治／新俳句人連盟	不明	不明	向井孝
大峰杉夫	不明	不明	不明
岡本潤	不明	不明	不明
押切順三	秋田市	不明	不明
火星人クラブ	不明	不明	不明
河合俊郎	愛知県渥美半島	不明	向井孝
(国下)磨瑛人	不明	不明	土居貞子
黒田榮三／デモン発行所	兵庫県佐用郡	不明	向井孝
神戸二十代の会／土曜詩人の会	(兵庫県神戸市)	■■中央	IOM 同盟
新日本文学会神戸支部	神戸市	灘	IOM 同盟
田中伊佐夫	不明	不明	向井孝
高島洋	不明	不明	不明
玉本格／鏽同盟	不明	不明	向井孝
辻五郎／B Aの会	不明	不明	向井孝
土居貞子	(広島県広島市)	不明	不明
中村温	東京、市川市	不明	向井孝
(中村温)	不明	不明	不明

差出人名	差出人住所	消印	宛先
錦米次郎	松坂市	松阪	向井孝
萩原晋太郎	東京都練馬区	不明	不明
深川宗俊	不明	不明	不明
藤本正彦	大阪府	不明	向井孝
古河健三	東京都	不明	向井孝
港詩人倶楽部	神戸市	不明	不明
柳井秀	姫路市	姫路	向井孝
山鹿泰治／世界市民日本登録部	京都府(京都市)	不明	不明
山口英	不明	不明	向井孝
吉塚勤治	不明	不明	不明
われらの詩の会	広島市	不明	向井様方 IOM 同盟
不明	神戸市	不明	向井孝
不明	不明	不明	土居貞子
【1953年元旦】			
差出人名	差出人住所	消印	宛先
青山大學／藝備評論社	三原市	三原	向井孝
麻生久	福岡県京都郡	■倉	向井孝
綾見謙	大阪市	東淀川	内海繁
生田均	兵庫県赤穂郡	兵庫上郡	向井孝
池田昌夫	(兵庫県姫路市)	不明	内海繁
(石川三四郎)	東京都世田谷区	千歳	高島洋
市川白弦	京都市	不明	向井孝
伊藤習司／「氷点」「壁」発行所	北海道室蘭市	室蘭	IOM 同盟
伊藤■■■	豊岡市	豊岡	柳井秀
伊藤■■■	豊岡市	豊岡	向井孝
井野慈彦	(兵庫県)石見局区内	網子	向井孝
井口純二郎	不明	新宮	向井孝、IOM 同盟
入江亮太郎	東京都豊島区	落合長崎	向井孝
岩木浩	大阪	大阪東	向井孝
植村諦	記載なし	杉並	向井孝
植村諦	不明	杉並	高島洋
内田豊清／鏽同盟詩社	神戸市	長田	イオム同盟 向井孝
内田義廣／「中央山脈」発行所	山梨県東八代郡	なし	なし
内海繁	(兵庫県姫路市)	不明	向井孝
鶴尾春二	不明	相生	向井孝
及川均	東京都杉並局区内	杉並	向井孝
扇谷義男	横浜市	横浜	向井孝
大崎二郎	高知市	高知	向井孝

差出人名	差出人住所	消印	宛先	差出人名	差出人住所	消印	宛先
大沢正道	東京都新宿区	不明	向井孝	新日本文学会	東京都新宿区	新宿	イオム同盟
鳳眞治	姫路市	姫路	向井孝 イオム同盟	末川博	京都市	左京	内海繁
岡本廣司／ 「浜工詩人」 編集部	浜松市	不明	生田均	杉浦伊作	浦和市	不明	生田均
岡本慈■	姫路市	姫路	詩歌教室	杉藤二郎	福岡県飯塚局区 内	飯塚	向井孝
岡本潤	東京都板橋区	板橋	柳井秀	世界市民日 本代表部	京都市	■京	向井孝
岡本美代浩	山口県	不明	I O M同盟	前進座一同 ／河原崎長 十郎一行	東京都武蔵野市	武蔵野	内海繁
小川正夫	愛知県知多郡	尾張大野	生田均	高島洋	神戸市	灘	内海繁
小川正夫	愛知県知多郡	尾張大野	向井孝	竹内好	浦和市	不明	不明
尾末奎司	広島県豊田郡	不明	向井孝	竹内好	浦和市	浦和	内海繁
小田切秀雄	記載なし	千歳	向井孝、生 田均	田中伊左夫	新潟市	新潟	向井孝
笈櫛二	横須賀市	横須賀	向井孝	玉岡松一郎	加古川市	加古川	向井孝
笠原伸夫／ 沙漠の会	東京江戸川区	不明	イオム同盟 向井孝	田村昌由	新潟市	不明	向井孝
蟹江眞人／火 星人クラブ	愛知県大府町	不明	I O M同盟	津田大観	姫路市	姫路	向井孝
金田弘	兵庫県揖保郡	不明	内海繁	壺井繁治	不明	中野	イオム同盟
亀井勝一郎	不明	武蔵野	内海繁	寺内邦夫	神戸市	不明	向井孝 I O M同盟
河合俊郎	記載なし	不明	向井孝	寺崎浩	不明	芦屋	向井孝
川並秀雄	西宮市	西宮	内海繁	(寺崎浩)	芦屋市	不明	高島徳一郎
川端康成	不明	鎌倉	内海繁	土井孝一	姫路市	姫路	内海繁
河邨文一郎	札幌市	札幌	向井孝	戸田光章	大垣市	大垣	向井孝様方 I O M同盟
木庭崑久男	姫路市	飾磨	柳井秀	成瀬純	広島市	■祇園	向井孝
釘谷芳男	静岡県吉原市	不明	向井孝	錦米次郎	松阪市	松阪	向井孝
黒田栄三	兵庫県佐用郡	不明	向井孝	西本■広	神戸市	■■中央	向井孝
航海表社	神戸市	神戸中央	向井孝	野田正五	北海道亀田郡	函館	向井孝
後藤一夫／ 詩火社	浜松市	浜松	向井孝	野田正五	北海道亀田郡	函館	生田均
近藤剛規、 福田律郎／ 「詩人集団」 編集部	千葉県館山市	館山	向井孝	萩原晋太郎	不明	不明	不明
佐々木実	京都市	京都中央	不明	長谷川龍生	不明	大阪南	向井孝
(佐々木実)	京都市	京都中央	生田均	浜口長生	三重県志摩郡	不明	I O M同盟 向井孝
(佐々木実)	京都市	京都中央	柳井秀	浜口長生／ 「三重詩人」 同人	三重県甲賀局区 内	三重甲賀	「年賀状平 和運動」事 務局向井孝
(澤村経夫)	紀州	不明	生田均	濱田知章	吹田市	不明	向井孝
(澤村経夫)	(和歌山県東牟 婁郡)	紀州宇久 井	向井孝	表現社	千葉県八街町・ 銀座デパート	■八街	向井孝 イオム同盟
重岡洋子／ BAの会	山口県徳山市	不明	向井考 I O M同盟	平野義太郎 山本熊一 中井一夫ほ か／日中貿 易促進会議	神戸市	不明	日中友好協 会播州支部 準備会 西 村操
柴田元男／ 詩行動社	東京都品川区地	大崎	向井孝	平山光子、 平山実	竜野市	龍野	内海繁
清水太郎	三重県南牟婁郡	木本	向井孝	廣田善夫	西脇市	不明	向井孝
清水幾太郎	不明	不明	内海繁	深川宗俊	ビロシマ市	不明	向井孝
新城明博／ 浪曼群盗同 人代表	福島県本宮下町	不明	イオム同盟	富士久夫	不明	不明	なし

IOM 同盟を中心とする街頭ハガキ展、詩歌原稿展および
姫路原爆展をめぐる資料の整理と検証

差出人名	差出人住所	消印	宛先
藤井実夫、 和子	姫路市	網子	向井孝
藤澤久子	神奈川県高座郡	横浜中	向井孝
藤本正彦	大阪	不明	向井孝
古河健三	東京杉並	杉並	向井孝
牧章造	東京都大田区	大森	向井孝
牧信介	神戸市	神戸中央	向井孝
(増田恭人)	広島県比婆郡	庄原	向井孝
増本烈	神戸市	神戸中央	小黑
松崎八笑亭/ 「劇団京藝」	京都市	京都中央	内海繁
三浦大二郎	神戸市	姫路	内海繁
水上文雄/ erre club	栃木県那須郡	不明	向井孝
港野喜代子	記載なし	西成	向井孝
港野喜代子	記載なし	西成	生田均
南淵信	大阪市	天王寺	向井孝
民芸通信の会	埼玉県与野町	不明	生田均
本根史朗/ 「三重詩人」	三重県一志郡	三重久居	向井孝
森浩	名古屋市	■村	向井孝 IOM 同盟
八代俊雄	姫路市	姫路	内海繁
安田長久 (向 井孝)	兵庫県姫路	なし	なし
安水稔和	神戸市	長田	向井孝
山口英	大阪市	東住吉	内海繁
山崎馨	大宮市	大宮	向井孝
溶岩詩人集 団	彦根市	彦根	向井様方 IOM同盟
除村吉太郎	東京、中野	不明	柳井秀
吉澤獨陽/ 「日本詩壇」 編集所	兵庫県芦屋市	芦屋	向井孝
吉村顕／季 節の会	大阪府池田市	垂水	向井孝

差出人名	差出人住所	消印	宛先
爐書房	奈良県高市郡	檀原	柳井秀
渡辺絢三	姫路市	姫路	柳井秀
渡辺絢三	姫路市	姫路	内海繁
渡辺順三	東京都世田谷区	世田谷	内海繁
■徳三郎	東京都杉並区	杉並	内海繁
■健介	東京都板橋区	不明	内海繁
不明	杉並区	荻窪	向井さま方 IOM同盟
不明	東京都杉並区	荻窪	向井孝
不明 [並木 和夫か]	東京世田谷区	不明	内海繁
不明 [内海 繁か]	姫路市	姫路	内田博
不明 [許南 麒か]	なし	山口	向井様方 IOM同盟
不明	不明	不明	生田均
不明	山口県徳山市	徳山	IOM 同盟
不明	神戸市	長田	内海繁
不明	不明	不明	なし
不明	(兵庫県姫路市)	飾磨	内海繁
不明	不明	不明	不明
【年月日不明】			
アナキスト 連盟	不明	不明	不明
大江満雄	不明	落合長崎	生田均
奥山静	なし	なし	なし
佐生旭	不明	不明	不明
藤本敏夫	(兵庫県) 養父郡	■八鹿	柳井秀
吉木炎	姫路市	姫路	向井孝
不明	神戸市	不明	向井孝 IOM 同盟
不明	大阪市	西成	IOM同盟 各員
不明	不明	不明	不明

Received:December 04, 2019

Accepted:December 04, 2019